

# 私のふるさと パラオ共和国

岡山 美奈子さん（昭和 14 年生まれ）

パラオは日本のはるか南、3,000 キロほど離れたところにある島国です。

パラオは 586 の島々から成り立っています。実際人が住んでいるのは 9 島です。ほとんどが無人島です。戦後、独立国としてパラオ共和国になりました。

パラオは、かつてはスペインやドイツの植民地でした。一年中が常夏の島。当時は、移民統治領として多くの日本人が本土から海を渡っていきました。

父もその一人で、家族を日本本土に残して農業指導員として砂糖工場やパイナップル工場などの開発にたずさわっていました。生計が成り立つようになって、母をパラオに呼び寄せたのです。母は 3 歳の男の子と 2 歳の女の子を連れての長い船旅をすることになりました。母の兄が港の棧橋まで送ってくれたそうです。母は最後までパラオ行きが嫌で嫌でたまらなかったのですが、我が子を父のいない子にははいけない、と思い、泣いて泣いて、棧橋を渡ったそうです。

両親の努力が実り、パラオでの生活は豊かになり、1939 年に私が生まれ、続いて妹、弟が誕生しました。当時、私たちが住んでいた家には広い庭があり、青々とした芝生が鮮やかで、そして一年中果物の香りがしていました。南国の果物は種類が豊富で、家の周りやヤシ林の間に、マンゴー・パパイア・パイナップル・バナナなどが植えられていて、いつもおやつ代わりに食べていたことが忘れられません。

その中でも私はマンゴーが大好きでした。母は真っ白なブラウスに黒のスカート。いつも甘い洋菓子を作ってくれていました。自宅では現地の方を雇っていて、母はいつも食材を調達してもらっていました。

「今夜はタコ、アワビ、それにタイもね」野菜はパラオ主食のタロイモ等。現地の方はピクやモリを持ち、長い足を器用に跳ね上げながら、「やっほ、えっぼ」と食材を持ってきてくれる姿はとても頼もしく感じました。そこで私たちは彼らのことを「やっほさん、えっぼさん」と呼びました。休日ともなれば、船を仕立てて、島巡りに行った先でよくバーベキューをして楽しんでいました。

満ち足りた生活も長くは続かず、日を増すごとに偵察機が空低く飛ぶようになりました。

機体の下に爆弾を抱えて・・・

大人たちは口々に「あれは偵察機だ」というようになりました。当時、幼かった私ですが、今でも耳に残っています。私たちの住んでいた家は、守備隊に接收され軍事司令部となりました。敷地内には多数の兵舎が建設され、無数の大砲の兵器や戦車もありました。

また、訓練所があり、毎日のように兵器の操作訓練などが行われていました。兄は小学 3 年生、学校への登下校時には司令部の番兵さんに敬礼して通行を許されていたそうです。

家族が病气やけがをしたときは、司令部の軍医さんに診察してもらっていました。母は地域の「国防婦人会」に入っていて、モップやバケツリレーによる消火訓練もしていたそうです。

1944 年 2 月、アメリカ軍による日本最大の基地であったトラック島の空襲がありました。

その時を境にして、私たちの生活は楽園から一気に戦火の飢えへの谷底に突き落とされていきました。さらに、父を始め、学校の教師などの大人の男性はすべて軍隊に招集されました。父が35歳の時でした。子どもたちを守るのは母親一人となってしまいました。

昼間はヤシ林に身を隠し、夜に家へ帰ってくるという生活がしばらく続きましたが、それも危なくなりました。母と私たち子どもらはジャングルへと逃げました。木々のこずえからこぼれる月の明かりと、ホタルの光を追いながら、夜どおし歩きました。食べ物はなく、木の実を食べた鳥たちの糞を拾って、石でくだけ、中の実を食べていました。

1944年3月30日未明に、パラオ大空襲でコロールという大きな町が全焼しました。コロールには軍事用の油、石油、食糧の保管倉庫、軍港などがありましたが、兵力の圧倒的な違いにより、あっという間に爆撃されてしまいました。油などが燃え上がる煙で、空は2~3日真っ黒の状態が続きました。その時私は5歳でした。

今でも耳に残り続けている爆撃音。家が空高く飛んでいくさまも目に焼き付いています。火柱がすさまじい勢いで広がっていく・・・  
幼い私には、何も理解できませんでしたが、ただただ怖かったことを覚えています。

昼夜間わすの焼夷弾の雨と爆弾。

また、ジャングルへは米軍の飛行機が油の入ったタンクに火をつけ、それをいたる所に落としていました。ジャングルのあちらこちらにも火の手が上がっていました。

頼りにしていた日本本土からの食糧の輸送船も来なくなりました。妹、弟は栄養失調となり、感染症になりました。今でも大きなハゲが残っています。

戦火が激しさを増し、女性と子どもには本土への強制送還の命令が来ました。持てるだけの荷物を背負い、家を出たのはいいですが、9歳、8歳、5歳、4歳、1歳の子どもたちを連れての出発。途中でまず5歳の私が泣き出しました。続いて、訳もなく下の2人。母は必死になってなだめるのですが、前の行列からだんだん遅れて取り残されていきました。その時の母の決断はこうでした。もうだめだ。死ぬときは一緒に。私たちは、横一列に手をつないで海に入っていました。妹の背丈まで入ったところで憲兵が通り掛かって、「おまえら何をしてるんだ、上がってこい」と言われ、私たちはもとい家へ引き返しました。

あとでわかったことですが、その時私たちが乗る予定だった船は撃沈されました。もし乗っていたら、今、私はここにいません。

その夜、憲兵が各家に人はいないか、見に来ました。私を見つけ「まだいたのか??」と。そこが組合長をしていた父の家だと知り、「明日南へ行くトラックがあるから、その荷物の上に乗れ」と言ってくれました。

翌朝、私たちは砂煙を浴びながら、荷物のひもにしっかりとつかまって、でこぼこ道を揺られていました。着いたところは、ジャングルの木が茂る洞窟のような場所でした。何組かの他の家族と一緒にになりました。

そこでは農耕婦人部というものが結成されており、母は5人1組で兵隊さん用のさつま芋やタ

ロイモを作る農作業に行くことになりました。農耕婦人部の畑作業がある日は、母は私たち一人ひとりの頭に手を添え、  
姉には「下の子を頼むね」  
私には「みんな仲良くね」  
妹には「おりこうにしているんだよ」  
弟には「兄ちゃんや姉ちゃんの言うことを守ってね」  
兄には「すまないねえ。妹や弟たちを頼んだよ」  
とこう言いながらも、「5人の子どもたちと2度と会えなくなるかもしれない」という想いを胸にしまって、仕事に出かけたそうです。

今でも目に焼き付いている母の後ろ姿ですが、葉の多くついている木の枝を何本か切り、束にして背中にモンペのひもでしっかり縛り付けて、まるで木が立っているかのようでした。思い出すと今でも涙がこぼれてきます。そこまでして戦争と戦った母親、子どもたち。苦しい経験の数々がよみがえります。

ある日のことです。

母は鍬を振り上げた瞬間、遠くに光を見ました。とっさに身を伏せた母。すぐ隣にいた人も伏せたのですが、少し離れていた他の3人は焼夷弾に当たり、死んでしまいました。

家にたどり着いた母は、「母ちゃん」と飛びついてくる子どもたちの姿を見て安堵したそうです。母からのお土産は木の実だったり、さつま芋のつるだったり、食べられそうなものなら何でも持ってきてくれました。

食料といえば、道ばたのタンポポ、オオバコ、タニシ、セリ、芋のつるはご馳走。何でも食べました。味付けは海から時間をかけて汲んできた海水です。海水で洗って食べるだけです。火を使うと煙が立つので、暗くなってからしか、火を使う料理はできませんでした。

ある日、兄弟で食料探しに出かけたときの事です。私は5歳になっていました。ちよろちよろと行ったり来たりしていました。

「伏せろ！」と兄は叫びました。

その場所でそれぞれに腹ばいになり、ぴくりとも動かない、というより動くと死が待っているという恐怖がありました。私たちの頭上でB24が飛んでいきました。今思えば、実に滑稽な姿でした。

間もなくこの場所も危険になり、安全地帯へ逃げました。中には母親を亡くした子どもたちもおりました。歩き始めは皆で励まし合っていましたが、それぞれに自分たちの家族のことでいっぱいになり、気がつけばその子らの姿はなく、悲しい思いをしたと母が語っていました。

その時10歳であった兄は、軍が管理する農場の伝令を命じられ、ジャングル内に点在する各部隊を回っていました。少年に伝令をさせるのは米軍戦闘機による上空からの監視を避けるための手段であったようです。兄は伝令に行く途中に米軍の戦闘機に発見され、ほんの10センチのところに銃弾が飛んできてとても怖かったと話していました。米軍機が低空で来たため、見上げた目の先に米兵の笑っている顔が見えたとのことでした。今、その時の兄の心境を思うと、涙がこぼれ落ちます。

兄は一度、伝令内容を間違えたということで、責任者の軍曹が怒って、拳銃を向けられたと聞い

たことがあります。まったくひどい話です。

母は婦人部の仕事でいないので、兄が伝令に出かけるとき、必ず私たちに約束させることがありました。

姉、妹、弟、私を横一列に座らせて、「いいか、兄ちゃんが帰るまで、ここを動くな。動くと死ぬぞ」と私たちの指定位置を決めていったのです。周りには太くて大きな木。枝が視界をさえぎってくれていますが、枝の間からは敵機が旋回しているのが見えました。遠くで「どか〜ん」と爆弾の音。近くでは「バリバリバリ」と焼夷弾の音。空からは機関銃。

母ちゃんや兄ちゃんが無事に帰ってくるという保証もない中で、私たち幼い兄弟は恐怖と心細さで、口も体も固まっていました。

あの頃は本当に寂しくて不安でした。どれほど時間が経った頃でしょうか。

「姉ちゃん、おしっこ」と弟。

「もう少し待って」と私。

「うん・・・」

でも、しばらくたつと「もう我慢できない！」

「兄ちゃんが動くな、と言ったよ」「やだ〜やだ〜!!」「すこ〜しだけ、前へ。立ったら見つかってしまうからね」

弟は少しだけ前へずれて用を足しました。

こんな話をしても誰も信じてくれないと思いますが、本当に動いたら「死」が待っていました。少しでも動く機関銃の弾が飛んできたのです。

兄ちゃんが帰ってきました。ポケットに乾パンを4つ入れて。軍の人がくれたものです。

「兄ちゃんのがないよ?」「俺はいいんだ」兄は顔を少しだけよこにそむけて、ぼそっと言いました。あの時の幼かった私は兄にちゃんと「おいしかったよ、ありがとう」と言えたのでしょうか。今でもあの乾パンの味が忘れられません。

ある日、11歳の子どもが軍用のさつま芋を盗みました。

軍に見つかり、その子は銃殺されました。こんな悲劇も日常でした。毎日を慎重に行動して無事に過ごせるように祈りながら、過酷な生活に耐えていました。極限状態の生活環境にあたって、まだ幼い兄弟5人の子どもを抱えた母の心労は想像することができません。

明日の命の保障もなく、毎日食べ物探しと危険との戦い。戦火は隣の島、ペリリュー島で激しくなっていました。一方、パラオ島の方では戦火はゆるやかになったかのように見えたのですが、ペリリュー島の飛行場が占領され、昼夜問わず激しい戦火となりました。

そしてついにその日が来ました。1945年8月15日、母と兄は「天皇陛下のラジオ放送があるから集まれ」という連絡を受け、出かけていきました。

返ってきた母と兄からは日本が戦争に負けたことを知らされました。

私たち家族も戦争のためにすべての財産を失いました。その時、初めて母と兄は「明日からどうしよう」と未来に向けての話をしたそうです。

次の年、日本への引き揚げ船があるとの通達があり、私たち一家は日本へ帰ることにしました。

父は機関銃で左の人差し指を失い、お腹をえぐられる大けがをしたのですが、1946年1月に無事に私たちの元に帰ってきて、全員の無事を喜びました。日本と一緒に帰れることになり、非常に運が良かったとしか言いようがありませんでした。

引き揚げ船に乗る時のことです。アメリカ兵が船に乗る私たちの手伝いをしていてくれました。もらったチョコレートの甘くておいしかったこと。

アメリカ軍は港近くの砂浜にテントをいくつも張って、食糧・洋服などを日本人に配っていました。その中でも、コンビーフ、バター、米、果物の缶詰などの食料の支援がありました。アメリカ軍兵は兄に「たくさん食べてお腹を壊すなよ」と言って、微笑んだそうです。

衣類はアメリカ軍人のお古で、すべて大人用。大きすぎて子どもにはブカブカでしたので、腰に巻き付けるようにして身に着けました。

こうして私たち幼い兄弟は、父親が不在中の戦火の中、母や兄に守られて、命という宝物をもって日本に向かいました。

引き揚げ船として使われたのは「たけ」という駆逐艦でした。

「たけ」は1260トン、全長100メートル、幅は9.35メートル。収容人数は211名となっています。そして何より心強かったのは、「たけ」が前の年にアメリカの駆逐艦「クーパー」を撃沈させたヒーローだったことです。終戦の時、航行可能な状態で呉の基地にいた「たけ」は復員兵輸送に従事し、ボンベイ島と浦賀を二往復、サイパン島からサイパン在住の沖縄県民を沖縄本島まで輸送したり上海と日本の間も往復していました。そんなヒーローが私たちを迎えに来てくれたわけです。

政府御用達ごようたしの駆逐艦「たけ」の船内での食料は豊富で、3食お米のごはん、味噌汁、焼き魚などが出ました。北へ向かう2月の太平洋の波は荒く、とても怖い思いをしました。

男性は皆、デッキで用を足していました。あるとき、兄が用を足しに行くというので母は4歳の弟を連れて一緒にデッキに行きました。船室からデッキに出る扉を開けた瞬間、大きな横風とともに大波に見舞われ、そのまま兄は船の甲板に尻もちをつき、強い風とともに10数メートル押し流されました。母は兄の後を追いますが、船は高波と風の強さに今にも沈没するかのよう横に傾いています。尻もちをつきながら滑っていく母と兄はやっとの思いで船の柵につかまり助かりました。この様子を弟は恐怖でおびえながらじっと見ていました。もし兄が海に落ちていたなら、母も荒れ狂う海に飛び込んでいただろうと話していました。本当に子どもを守ってくれる母でした。

あるとき、ひたすら母国日本を目指して北に向かう私たちは、2月の海がしけると、トビウオも大きな群れとなって、雪の舞う荒波を駆逐艦と伴走するかのよう飛び跳ねている姿を船の窓から見ていました。1か月余りの船旅を終えて、神奈川県神奈川県の浦賀港に着岸しました。船から降りた私たちは口々に「お母さん、砂糖がいっぱい落ちている、塩がいっぱい落ちている、なんで冷たいの？」母は「雪だよ」と教えてくれました。

引揚者収容所へと連れていかれました。そこで伝染病の検査、また頭にはDDTを真っ白になるまでかけられたことを覚えています。足に合う靴をもらい嬉しかったことも忘れられません。母は戦争が激しくなることを知り、母と兄の腹に国債、現金、預金通帳など腹巻にして大切に持ってきたものがすべて収容所で無効となり紙屑同様になりました。

政府からのわずかな借入金で母の実家に行きました。

やっとの思いでたどり着きましたが、母がパラオへ行くとき棧橋まで送ってくれた母の兄は、シベリアで戦死していました。実家にも私と同じような子どもが、5人いました。そこには長くいられず父の実家へ行きましたが…。迷惑がられました。

そんな時、引揚者対象の開拓地募集があることを知り入植できることとなったのです。入植とは、何も無い荒地をきれいにして、自分たちで畑や家を作って、そこに住むということです。

大きな木は伐採してありましたが、直径15cmくらいの木はたくさん立っていました。両親は1日でも早く実家を出たく、家の柱になりそうな立木に横棒を渡し、わらで囲いました。屋根もわらの家ができあがりしました。雨が降ったら、何もかも濡れてしまう。家族7人、寄り添うように寝ました。遠くでキツネがなく…。

父は幸いにして、国家公務員として働きだしました。

冬が来る前までに…。何とかしなければという思いから、父は廃材を集めました。

やがて、近所の人たちの手助けもあり、トタンの屋根ができあがりしました。嬉しかったのを覚えています。しかし、電気はなく、ローソクの明かりで兄は一生懸命勉強していました。

いちばん困ったのは飲み水です。40度も傾斜のある坂道。人1人やっと通れる道。

行きは下りるけど、帰りは弟を前にして天秤棒に水の入ったバケツをかけて、登ります。もう少しで平地に出るところで、弟はバランスを崩し、転んでしまいます。水は勢いをつけて下へと流れてしまいました。私の服はびしょびしょ。水はなくなる…。

こんなことを繰り返して、飲み水は子どもたちの仕事でした。

父は軍隊に入って、人が変わってしまった、と母がよく言っていました。あの優しかった父。

母には絶対に手を上げなかった父が、ちょっとしたことで母をたたきました。子どもたちはそれを見てとても悲しかったです。

母は開拓、子どもたちのことで身体も心もすっかり疲れ切っていました。「もう、死んでしまいたい」こんな思いから、ある夜、姿が見えなくなってしまいました。

子どもたちは心配でたまりません。外は真っ暗。

「母ちゃんを探しに行こう」誰かが言いました。

「行こう」「きっと山の中だよ」「さあ、みんなで母ちゃんを呼ぼう！」誰かが言いました。

「母ちゃん」「おかあちゃ～ん」「かあちゃ～ん」

5人の子どもたちが1回ずつ呼びました。その時、母の耳には5回届く…。

山びこが返ってくる…。母は涙が止まらなかった…と、あとで聞きました。

母の姿を見た子どもたち。「もう、どこにも行かないで…」

本当に悲しい出来事でした。

貧乏でもいい。両親がいてくれたら、と思いました。

やがて、電気もきて、水道も引かれました。生活もやっと安定してきました。

私たちにとって瓦屋根の新しい大きな家も出来ました。晩年は、父と母の力関係が逆転しました。

その姿はとても微笑ましい姿でした。

戦争は…戦争は武器を持ち人と人の殺し合い。

戦争は人の心まで変えていきます。

何一ついいことはありません。

戦後 80 年の月日が流れても、私の心の中の戦争は終わっていません。今でも大きな音が突然響くと、体がびくっと反応します。同じ大きな音でも、打ち上げ花火の音はどこか優しさを感じ、また飛行機などの音は爆弾が落ちてくるような錯覚を覚えます。幼いころに受けた衝撃は消えることがありません。兄は最近こうも言っていました。

アメリカ軍兵たちは戦争に負けた日本国民に対し、食料、洋服などたくさん配ってくれました。一個人、人と人との触れ合いはあの時の恐怖心からは想像できない、とても暖かな気持ちになれたとのことです。

そして月日が流れ、2006 年、ふるさとパラオ共和国へ里帰りしました。娘夫婦と小学 2 年生になった孫との旅。

パラオ空港ができ、成田空港から直行便で 4 時間。快適な空の旅でした。

私の生まれた清水村を知っているタクシーの運転手をお願いして、案内をしてもらいました。途中、立派な橋があり、それは日本の鹿島建設が作ったものだと聞かされました。道は熊谷建設や大林組など…。

自動車は実に日本車ばかり。トヨタ、日産、スズキなど、実に多く走っていました。

さて…

清水村に着きましたが、そこは現地の人の家が数少なく建っていて、その中の 1 軒の家にお邪魔して話を聞くことができました。

家の中には日本人が使っていたミシンやなべ、フライパン、アイロンなどが数多く見られました。父があの時、組合長として築き上げた当時の産業、パイナップル畑、パイナップル缶詰工場…何一つ残っていませんでした。戦争があったために、荒れ地と化し、残念です。

ここにも戦争の激しさが、いまだに残っていました。現地の人から、日本人がパラオにいたために自分たちとは関係ない日本とアメリカの戦争に巻き込まれ、土地と命を奪われた、と聞かされました。私は心の中で詫びていました。

孫の希望でペリリュー島に行きました。パラオコロールの南、50 キロ。コロールからボートに乗り、2 時間余り。ペリリュー島が近くなり、港の少し手前に日本軍の戦闘機が沈んでいました。翼や尾翼にくっきりと日の丸が見えました。じーっと見ていたら、泡ぶくが 1 つ上がってきました。「戦いはいやだよー、ふるさとへ帰りたい。怖かったよ」そんな呼び声がしたような、とても悲しい気持ちになりました。

上陸して防空壕へ足を踏み入れました。

つぶれた鉄カブト、飯ごう、靴の片方、ガラス瓶、割れた茶碗。

いろいろな物が散乱していました。

ここは介護室。訪れた人が手向けた線香の燃えきっていない断片。背筋が冷たくなりました。

ペリリュー島の1つの滑走路には戦火の激しさを物語るかのように、米軍、日本軍の戦車が数台取り残されています。

本などで知る限り、ペリリュー島の戦いは言葉、筆には表せません。皆さん、ぜひ、ペリリュー島へ足を運んでください。折り鶴とお線香を忘れないでくださいね。

(原文のまま掲載しています)



父の徴兵前に撮影した家族写真



里帰りした時に岡山さんが撮影したパラオのジャングル